

<研究ノート>

スタディツアーの教育的意義と課題 — JICA カンボジア事務所での経験に基づいて —

高橋 優子*

The Educational Significances of *Study Tour*: Based on Experiences at JICA Cambodia Office

TAKAHASHI Yuko *

抄 録

カンボジアへのスタディツアー等訪問者は年々増加し、多様化している。独立行政法人国際協力機構（JICA）カンボジア事務所は、国際協力やボランティアへの関心の高まりに対応するために、NGO-JICA ジャパンデスク¹を設置し、JICA の窓口として、スタディツアーの受け入れや訪問者からの相談に対応してきた。

筆者は、JICA カンボジア事務所の NGO デスクコーディネーターとしての経験²を通じて、近年増加傾向にある開発途上国におけるスタディツアーの有効性と課題を考察するために、2005年1月から2007年3月までに対応した、スタディツアー106団体を含む訪問者988名の報告書および感想文をレビューした。そこからは、①自分の目で見て、体で感じる学びの意義、②出合いの素晴らしさ、③現地の人から学ぶ姿勢の大切さ、④経験を伝えていく必要性、⑤お金に係る葛藤、という5つの学びの傾向が見えてきた。また、スタディツアーのインパクトを考察する上では、現地の受け入れ側に与え得る好ましくない影響への配慮が必要であることも確認された。

本稿では、参加者の報告書をレビューすることから、参加者のその後の生き方についての可能性と発展性を与えるスタディツアーの教育的意義が示された。

1. スタディツアーの定義

法務省の統計によると、1964年には13万人だった海外旅行者数は、2002年には1652万人に増加している³。近年、その海外観光旅行に一味違った「プラスα」の要素を求める傾

向も強くなり、その象徴的な形が「スタディツアー」である。スタディツアーに関する学術的な研究はほとんどなく、明確な定義は存在しない。スタディツアー研究会⁴（2000）では、スタディツアーとは「国際協力・交流市民団体（NGO）などが相互理解や体験学習を

* 筑波学院大学社会力コーディネーター、Tsukuba Gakuin University

目的として行うツアー」を指し、単なる観光旅行とは異なり、「現地事情や、NGO 活動等を学習できる」「現地の人々と同じ目線で交流できる」「参加者自らが活動に参加できる」という特徴を持つと説明している。本稿ではスタディツアーを、開発途上国の現場視察と現地の人々とのコミュニケーションを通じた実体験による学びを目的としたツアー、と定義する。

現在、国際協力 NGO センター⁵ (JANIC) に登録する約400の NGO のうち、約半数の団体がスタディツアーを実施している。実施時期は日本の夏季、冬季の休暇時期に集中しており、年間総計500から600回のツアーが実施されている。NGO 主催のスタディツアーへの参加者は、年間で延べ1万人を超えると推定される。大学や地方自治体等が実施するツアーも含めると、参加者数は約3万人と考えられる。

スタディツアーは、通常、社会問題や歴史的な事件のあった現場を訪問し、見聞を広めるという教育的側面がある。現地の事情に詳しい関係者からのレクチャーと関係者との交流プログラムを通して、その社会や国民に対する理解をより深めていくことになる。

また、スタディツアーでは、個々の旅行者が自由に行う観光旅行とは異なり、企画者側が参加者に伝えたい特別なメッセージがある場合が多く、訪問者に企画者側の意図が効果的に伝わるようなプログラムが組まれている点に最大の特徴がある。また、学習という教育的側面だけでなく、観光地への訪問も含まれる場合が多く、娯楽・消費的な要素を同時に満たすことも特徴である。

スタディツアーの広がり、もともと修学旅行という素地がある日本において、主に海外で活動する NGO が支援者を現場に連れて行くツアー旅行を始めたことに端を発している。現在、その形態や目的の多様化、数の増加が進んでいる。

2. スタディツアーの方法と結果

2. 1 スタディツアーの種類

スタディツアーの実施内容を企画者別に、JICA、大学や地方自治体等、NGO の3つに分類して整理すると以下ようになる。

まず JICA が企画するスタディツアーの目的は、JICA 理解・政府開発援助 (ODA) 理解の促進にある。訪問先としては、JICA 技術協力プロジェクト、ボランティア (シニア海外ボランティア、青年海外協力隊) の活動現場、無償資金協力で建設したインフラ、昨今では、草の根技術協力事業を展開するパートナー NGO の活動視察も可能になった。ODA の使われ方に興味がある参加者に適したツアーである。

大学、地方自治体等が企画するスタディツアーは、国際協力と開発途上国の現状への理解を深めてもらうことを目的に実施されている。国際機関、JICA、本邦 NGO、ローカル NGO、企業等、複数の団体を訪問するものが多い。このようなスタディツアーは、特定の開発課題と地域にテーマを絞って、その問題意識を掘り下げる際に効果的である。また、様々な視点からの話を聞くことで、特定の思想と理念に偏らずに開発途上国の社会を捉えるヒントを得ることができる。大学の取り組みにおいては、海外体験を単位化、必修化する試みも増えてきている⁶。

日本の NGO 企画のスタディツアーは、会員を中心とした多くの市民に現地活動を見てもらい、賛同者を増やすことを目的としている。コミュニティについての豊富な情報と現地住民との密な人間関係を活かした、交流会とホームステイを提供できる点が特徴的である。ツアーに受動的に参加するだけではなく、ボランティアに主体的に参加するプログラムを提供している団体もある。草の根の現場を見ることを希望する参加者に適したツアーである。

2. 2 スタディツアーの関係者

スタディツアーを構成する関係者は、便宜上以下の4つに分類することができる（図1参照）。

実施団体が受入団体にスタディツアーの打診をすることから、スタディツアーの準備が始まる。実施に至るまで、実施団体と受入団体間でプログラムと実施体制に関する詳細な調整を行う（図2参照）。実施団体は受入団体から受入の内諾を得ると、参加者を募集し、選考する。参加者に対しては、ツアー前後に、事前学習と事後学習を実施する。受入団体は、実施団体の依頼内容を受け、現地の訪問先への訪問依頼と調整を行う。こうして実施されるツアーでは、交流会や現地視察等を通して、参加者と現地の訪問先との接触が起こる。参加者が現地の訪問先に与える影響については、後の3. 1項で詳しく述べる。

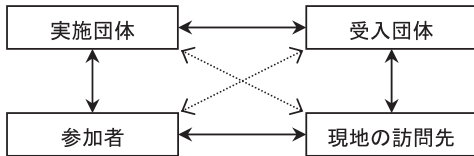


図1 スタディツアーの関係者

2. 3 JICA カンボジア事務所のスタディツアー受入数

JICA カンボジア事務所が正式に受入を行ったスタディツアーは、2004年には年間34件、2005年には年間51件、2006年には年間39件であった（表1参照）。そのうち大学企画のスタディツアーは、2004年に16件/34件中、2005年に19件/51件中、2006年に9件/39件中与大部分を占める。多くは、ゼミや教科単位で実施される「フィールド・スタディ」や「海外実習」と呼ばれるもので、担当教員が学生を連れてくる形式のツアーであった。その一方で、学生が自主企画するスタディツアーも増加傾向にある。2004年には学生独自で実施されたスタディツアーは1件のみだったのに対して、2005年には7件であった。国際協力に関心のある学生達を中心となり、他の学生を集めてツアーを組んだものや、学生が経験したスタディツアーの感動を高校生にも伝えたいと企画されたツアー、国際開発学を専攻する学生達が今後職業として途上国に関わっていく方法を探るために実施したツアー等があった。また表1-2からは、スタディツアーの実施時期が日本の夏季休暇中と年度末に集中していることが確認できる。

このように、現在開発途上国へのスタディツアーが増加している理由は、日本社会における国際協力・交流活動の活発化である。

		9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
実施団体 の動き	対 参加者			参加者 募集	広報	応募締切 参加者選考	事前研修 2回	実施	事後研修	報告書 作成
	対 受入側	実施計画 作成	受入団体 への打診	日程案 作成	正式な申 込み依頼		プログラム 調整			
			↓ ↑		↓ ↑	↓ ↑	↓ ↑			↓
受入団体 の動き	対 実施側		受入可否 の判断		正式な受 入回答	行程の最終 決定	プログラム 調整	受入		報告書フィー ドバック
	対 訪問先					訪問先への 依頼	訪問先と の調整			

図2 スタディツアー実施までの流れ（3月に実施する場合の例）

表 1 スタディツアー受入団体数と主催者内訳

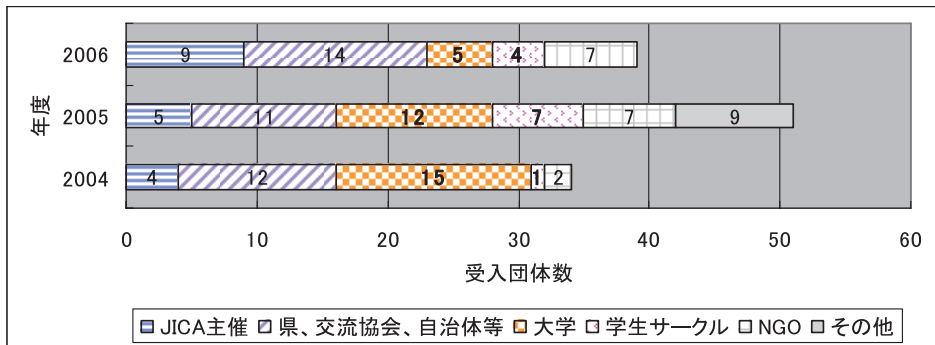
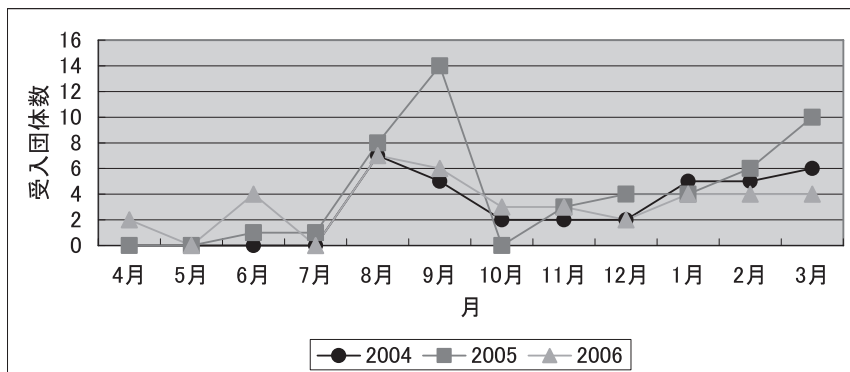


表 1-2 月別のスタディツアー受入数と参加人数



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
2004(団体)	0	0	0	0	7	5	2	2	2	5	5	6	34
参加人数(人)	0	0	0	0	105	34	11	39	15	58	50	37	349
2005(団体)	0	0	1	1	8	14	0	3	4	4	6	10	51
参加人数(人)	0	0	1	3	63	117	0	6	11	40	71	54	366
2006(団体)	2	0	4	0	7	6	3	3	2	4	4	4	39
参加人数(人)	12	0	77	0	87	63	11	37	51	43	47	49	477

2. 4 スタディツアー参加者へのインパクト

次に、スタディツアーが参加者に与えるインパクトについて検証する。ただし、スタディツアーを評価する体系的な手法がないため、2005年1月から2007年3月までに対応した、スタディツアー106団体の訪問者988名の報告書および感想から、参加者の声を抽出することを通してインパクトを確認する。こ

のようにレビューした感想は、スタディツアーならではの気づきと学びとして、以下5つの傾向に分類することができる。それぞれの傾向に対して、いくつかの感想を抜粋して紹介する。

- (1) 自分の目で見、体で感じる学びの意義
最も多かった感想は、「百聞は一見に如か

ず」、自分の目で見て、体で感じる確かさを学んだというものであった。観光旅行では行くことができない場所を訪問し、日本の基準からは想像も付かない現実と常識を覆すような事実直面し、強烈な衝撃を受ける傾向がある。

・ プノンペンごみ最終処理場では、至るところでごみが自然発火している光景、臭いの強烈なこともさることながら、そこでごみを捨てて生計を立てている人がいたり、そのごみの中に小屋を建てて住んでいる人が私たちをじっと見ていたり、子ども達のごみの中で普通に目を輝かせて走り回ったりしていることが驚きでした。私は可哀想だとか悲しさを感じるより、むしろ人間の生命力の強さ、環境への順応性、人間って強いんだなと感じずにはいられませんでした（一般）¹⁾。

・ スラム街に入った途端、悪臭と埃、汚物の散乱が目に入った。家々は狭ましとばかり並んでおり、一軒2～3畳の部屋に何人もが住んでいる。居住環境も食環境も満足するものではなかった。スラム街の人にとって健康とは何を意味するのか。病気が貧困を悪化させ、生活を困窮させる。貧困の極限を見て、辛さが残った（大学生）²⁾。

・ 裸足でいる子や服を着ていない子は貧しさゆえだと思っていたが、違うのではないか。ここの生活に適したスタイルなのではないか。発展途上国と聞いたら、すぐに貧困と連想しがちだ。そこから、全てをその視点で見えてしまう。彼らが今まで培ってきた生活形態を理解せず見落としがちだった。私の中の世界を見る目は確実に変わった。よく分からないが何か掴めた気がする（大学生）³⁾。

(2) 出会いの素晴らしさ

素晴らしい出会いに恵まれ、一つ一つの出会いが今後の人生において大切な財産になることを確信した感想が多かった。カンボジア人の良い出会いをした参加者は、カンボジアの国も好きになる傾向があり、国際協力の現場で働くロールモデルに出会うことができた参加者は、進路選択に大きな影響があった。年代と職業を超えた参加メンバー間でも、相互理解が進んだ。

・ 多岐に亘る分野で活躍されている日本人・カンボジア人のスタッフの方々が、とても生き生きとして仕事にとってもやりがいを感じているように見受けられました。この先、国際協力事業に携わりたいと考える私には、今回の出会いはとても貴重で、これからも大切にしなければならぬものとなりました（大学生）⁴⁾。

・ 出会いとは不思議なもので、何かに接していると、そこから広がって色々なところに繋がるができる。スタディツアーでの出会いがまた新たな繋がりを持たせてくれると確信している（大学生）⁵⁾。

(3) 現地の人から学ぶ姿勢の大切さ

現地の人々が精一杯に生きている姿に触れるとき、自分自身の原点と向き合う機会を与えられる。日本では当たり前には享受されているモノや環境等の有難さを再認識し、生きることの喜びと誇りを再確認する傾向がみられた。そこから、自分に与えられた環境の中で、精一杯に生きる責任を負っていることに気付いた参加者もいた。

・ カンボジア人の暮らしを見て、本当に今を精一杯に生きていることを感じた。電気が通ってなくても、水道が整備されていなくても、勉強道具が揃っていな

くても、その環境に臆することなく精一杯に生きていたと感じた。そしてカンボジア人と自分を「精一杯に生きる」という点で競い合わせたとすれば、自分が余りにも劣っていることを痛感した。だからこそ、カンボジアの人々の輝きに負けないように、僕たちも強く生きていかなければならないのだと感じさせられた(大学生)⁶⁾。

・日本では毎日に追われ、私自身について、深く考えることはありませんでした。毎日を過ごすことが当たり前ようになっていました。カンボジアで感じたことは生きていくことが幸せであること。家族がいて、友達がいて、毎日生きているそれが些細なことかもしれないけど一番幸せなことです(大学生)⁷⁾。

・日本はカンボジアに支援する側の立場ではなく、むしろカンボジアの方々の生活や考え方などから学ばせてもらう様々なことがあるのではないのでしょうか(大学生)⁸⁾。

(4) 経験を伝えていく必要性

ツアーで見聞きた現実に対して、今の自分にできることを考え、学びをどのように将来へ活かしていくかを考える参加者が多かった。中でも、自分が受けた衝撃と感動を多くの人に伝えていく必要を感じる傾向が強い。

・カンボジアでは、自分が何も出来ないもどかしさに襲われる場面に毎日遭遇して、その度に自分は何をしているんだろうと自問自答を繰り返し悩みました。それまで自分が援助だと確信していたことが、実は余り意味をなしておらず、すべてはそこにいる「人」たちのためであり、その人たちのために何をするかが大切だと感じさせられました(大学生)⁹⁾。

・今の自分にできることは、ツアーで受

けた衝撃と感動を自分の中だけに留めず、多くの人に知らせて、何かできることを考えていくことだと思う(大学生)¹⁰⁾。

・将来、海外で国際貢献できるような人間になるために、今できることは語学を勉強し、色々な人とふれあうことで、自分の感性を磨くことだと考えるようになりました(大学生)¹¹⁾。

(5) お金に係る葛藤

一方では、スタディツアーで受けた衝撃を消化しきれず、悩み続けている参加者もいた。特に、お金の受け渡しが発生する物乞いや物売りとのやりとりに対して葛藤が生まれる傾向がみられた。

・物乞いをしてきた子ども達に、どのように接すれば良かったのか今でも疑問に思っている。お金やモノは与えなかったけれど、寄って来た子どもたちを無視して、知らないふりをして通り過ぎたり、ごめんねと言いながら通り過ぎたりしていた。それで良かったのだろうか。未だに分からない(大学生)¹²⁾。

・国際協力の方面に進みたいと考えている私にとって発展途上国の現実と国際協力そのもののあり方というのが1番考えさせられた。観光地で寄付を求める障害を持ったホームレスの人々。トンレサップ湖で船に乗ってジュースを売りに来る子どもたち。私は旅の間ずっとできるだけ彼らから目を背けていた。お金をあげることに対する抵抗なのか、その行為自体に対する疑問なのかはわからない。ただ、現実と向き合えない自分がいたことは確かである(大学生)¹³⁾。

以上のように、現場に身を置いた時の学びと五感を駆使して受け取る刺激の大きさは、

スタディツアーの有効性を際立たせている。途上国での自分の振る舞いについて、答えを見出せずに葛藤することも、国際協力への理解を深める上では不可避な経験である。スタディツアーは、広く社会を見る視点や社会の構造、問題解決のための方法について深く考え、自分自身の生き方にも大きな影響を与え得ることから、発展性のある教育的な意義が非常に大きいといえる。

3. スタディツアーの実践への課題

3. 1 スタディツアーの問題

スタディツアーのインパクトを考えるとときには、参加者への正のインパクトだけではなく、受入側に与える負のインパクトについても考慮する必要がある。筆者の経験から4つの問題を指摘する。

第1の問題は、参加者がツアーを通して与える金品がもたらす現地への混乱である。例えば、孤児院を訪問した時に、高額の米ドル紙幣を直接手渡そうとした参加者がいた。この行為は孤児達に「スタディツアーが来たらまたお金をもらえるかもしれない」という期待を無責任に植えつけてしまう結果となった。別の例では、日カ交流を目的にグランドゴルフ大会を開催し、ゴルフ用具一式をカンボジア側に贈与したツアーがあった。現地のカンボジア人はルールも分からず交流会に動員された上、今後使う予定もないゴルフ用品を押し付けられたことで、スタディツアーに対する不信感を抱く結果となった。日本と経済格差の大きい開発途上国を訪れる日本人は、善意で金品を直接現地の人に与えがちであるが、この行為が現地の人たちに与える影響は想像以上に大きい。

第2の問題は、参加者の都合が現地の人々に強いる無理な要求である。日本人の海外旅行は、短期で過密なスケジュールを組む傾向があるが、スタディツアーでもこのパターン

が踏襲されている。例えば、日本の夏期休暇中はちょうどカンボジアでも夏期休暇中に当たるが、参加者の強い希望により、無理やり教員を動員して学校現場を作ったことがあった。

第3の問題は、無関心な態度や批判的な発言である。受入側の説明に対して、喧嘩腰にODA批判をしたり、或いは居眠りをしたりという言動に不快感を与えられた場合があった。

第4の問題は、受入側に対して何のフィードバックもないことである。ツアー後のお礼や帰国の連絡さえもない場合があった。

このようにスタディツアーは、参加者の希望や実施者の意図が優先されるあまりに、受入側への配慮に欠け、結果的にツアーを受け入れる現地の人たちにとって好ましくない事態を引き起こすこともある。

3. 2 問題に対する対応と課題

これに対して、JICAカンボジア事務所が受入側として行ってきた取り組みから、参加者の善意を活かし、現地の受入側にとっても有意義なスタディツアーにするための一つの解決策を示す。

第1と第2の問題に対しては、参加者の期待と要望にできるだけ応えるプログラムを組むと同時に、訪問先への配慮を持ってもらえるような説明と調整を行った。特に、寄付や交流会やホームステイ等の、訪問先への好ましくない影響を与える可能性がある依頼に対しては、JICAとして対応できる範囲とできない範囲を明確にし、開発援助を実施する立場からは譲れない視点を説明した。それでも参加者の発意と善意が現地のニーズに合わないと判断した場合には、依頼を断ることもあった。万が一、事前の調整内容とは異なる想定外のハプニングが発生した場合には、現地の事情を知るスタッフが対処できる態勢を整えた。したがって、いかに実施側と受入側

の思惑を合致させたプログラムを提案し、調整できるかがスタディツアーの成否の鍵となる。そして、その調整を行うコーディネーターの機転は重要な役割を担っている。

第3の訪問先に与える不快感に対しては、参加者に対して事前オリエンテーションを必ず実施した。一過性ではあるが、現地の人達との接触を行う分、現地の人達に不快感を持たせたり、迷惑をかけたりしないような基本的な配慮ができることが必要である。オリエンテーションを経て、現地視察をしてもらうことで、JICAが理解して欲しい開発課題と日本の取り組みについての理解が深まり、視察現場での想定外のハプニングの発生予防にも繋がるようになった。ただし、参加者一人一人のやる気と興味を引き出し、ツアーを有意義に過ごすための動機付けの部分については、実施団体が責任を持って準備することが望ましい。

最後に第4のフィードバックについては、スタディツアー報告書の提出を義務付けた。参加者からのフィードバックには、受入側がより良くツアーを実施していく上での貴重な視点が含まれていることが多い。また非日常的なスタディツアーの体験は、日本の日常に戻ると夢のような体験に終わってしまいがちだが、参加者一人一人がツアーを通して何を感じ、考えたかを整理し、表現する機会を提供することで、そこでの経験をその後の生き方に反映させていくことができるようになるのである。

以上3つの取り組みを示したが、スタディツアーを実施する上で最も重要な要素は、実施団体と受入団体間の調整を行うコーディネーターの役割である。参加者の動機を反映した実施者の考えと現地訪問先への配慮を重視した受入側の考えが合致する時、双方に益するスタディツアーが成立する。

しかし、残った課題もある。JICAは開発援助の実施団体であるため、スタディツアー

の教育的意義を十分に発揮するようなプログラムを提供できていない。開発教育を実施する専門機関と連携しながら、スタディツアーの実施体制を強化していく必要がある。また今後、スタディツアー参加者の進路選択の結果が表れてくるが、現地における活動の受け皿としての基盤が脆弱であることは否めない。若い世代が、活動に参加しながら学べるような現地の態勢を拡充していく必要がある。

4. 結論

本稿では、スタディツアーの教育的意義と課題について検証してきた。報告書のレビューから明らかのように、現場に身を置いて、多様な人と出会い、そこに生きる人間のエネルギーを目の当たりにしながら、貧困や開発援助の真実を探る学びは非常に大きい。同時にそれは、自分自身を見つめ直す機会にもなる。筆者はこれを「ところが奮えるほど揺れ動く」体験と呼ぶ。目の当たりにした開発途上国の現状と私達が生きる日本社会の豊かさや歪みを比較した時に起こるころの動きである。実体験により強く揺れ動いたころは、いつ何のきっかけになるか分からない。ツアー後すぐに海外ボランティアに挑戦したり、身近な所でできることに取り組んだりと行動につながられる人もいれば、将来的に国際協力に携わるために専門的な勉強を進める人もいる。一方では、現場での衝撃を消化できずに悩んでいる人もいれば、何も得られなかったと言う人もいるだろう。将来的にどう繋がったとしても、もしくは結果的に繋がらなかったとしても、現場に行ったという事実は変わりのない体験として個人の中に残っていく。国境や文化や違いを越えた出会いと、そこで感じ、考えた経験は素晴らしい財産となる。そこにこそ、スタディツアーの教育的意義が存在する。スタディツアーの教

育的意義とは、まさに、参加者へその後の生き方についての可能性と発展性を与える機会を提供することにある。

注

- 1) NGO デスクは、2006年時点で世界20カ国の JICA 在外事務所に設置されており、国毎に NGO 連携や市民参加協力を促進するための取り組みを展開している。
- 2) 2003年7月～2007年3月までの3年8ヶ月間、筆者は(特活)国際ボランティアセンター山形(IVY)、(特活)シェア＝国際保健協力市民の会、JICAカンボジアでカンボジアの国際協力を携わってきた。その間カンボジアを訪れる多くの学生の受入が相談を行ってきた。
- 3) 法務省ホームページ：<http://www.jata-net.or.jp/> 参照日 2007年10月14日
- 4) スタディツアー、ワークキャンプの質的向上を目的に、ツアーを主催・企画・運営している NGO、国際交流団体、旅行会社などを中心に1997年5月に発足した研究会。
- 5) 国際協力を行う日本の市民組織(NGO)の活動の促進及び強化を図るネットワーク NGO。
- 6) 恵泉女学園大学が、2006年11月に、関東地方にある国公立大学の文系学部153大学376学部を対象に実施した体験学習の基礎調査結果によると、48校(全体の41%)、72学部(全体の27.6%)で体験学習を卒業単位に含まれる授業科目としていた。

参考文献

- 1) JICA 筑波/(財)茨城県国際交流協会(2006)『カンボジアスタディツアー報告書』、p28
- 2) 日本赤十字看護大学(2004)『平成16年度国際看護学演習カンボジア体験集』、p42
- 3) JICA 中国/(財)ひろしま国際センター(2007)『カンボジアスタディツアー報告書』、p23
- 4) (財)神奈川県国際交流協会(2005)『カンボジアスタディツアー報告書』、p54
- 5) (財)神奈川県国際交流協会(2005)『カンボジアスタディツアー報告書』、p68
- 6) (財)神奈川県国際交流協会(2005)『カンボジアスタ

ディツアー報告書』、p51

- 7) JICA 中国/(財)ひろしま国際センター(2007)『カンボジアスタディツアー報告書』、p36
- 8) (財)神奈川県国際交流協会(2006)『カンボジアスタディツアー報告書』、p97
- 9) (財)神奈川県国際交流協会(2006)『カンボジアスタディツアー報告書』、p88
- 10) (財)神奈川県国際交流協会(2006)『カンボジアスタディツアー報告書』、p86
- 11) JICA 中国/(財)ひろしま国際センター(2006)『カンボジアスタディツアー報告書』、p29
- 12) (財)神奈川県国際交流協会(2006)『カンボジアスタディツアー報告書』、p86
- 13) JICA 中国/(財)ひろしま国際センター(2007)『カンボジアスタディツアー報告書』、p23

門脇厚司(1999)『子どもの社会力』岩波新書

田中博編(2000)『スタディツアーにおける現地受け入れ側インパクトの考察』スタディツアー研究会

スタディツアー研究会(2005)『第6回 NGO スタディツアー全国研究集会報告書 学生の海外体験学習～大学のプログラムと NGO スタディツアーの連携を求めて～』スタディツアー研究会

JICA カンボジア事務所(2006)『NGO 連携ワークショップ報告書』JICA カンボジア事務所

上智大学浜田ゼミ(2002)『～メコンに魅せられて～ラオス、カンボジアの可能性(浜田ゼミ論文集)』

国際こども支援団体 H & H(2003)『カンボジアスタディツアー 2003』

法政大学法学部後藤ゼミナール(2004)『2004年度海外研修旅行エッセイ集』

桜美林大学国際学部牧田ゼミ(2004)『カンボジア NGO 研修報告書』

日本赤十字看護大学(2004)『平成16年度国際看護学演習カンボジア体験集』

広島県立御調高等学校・御調町立御調中学校(2004)『御調中学校・高等学校国際理解教育実践報告書』

BRIGHT SMILE CLEAR VISION(2005)『大学生と行く高校生カンボジアスタディツアー報告書』

(特活)国際協力 NGO センター(JANIC)/(財)日本ユニセ

- フ協会共同事業（2005）『報告書：「『南』の子ども支援 NGO 能力強化 5 ヶ年計画」4 年度海外研修 2005.7/31～8/7』
- 北海道千歳北陽高等学校（2005）『第四回生徒海外研修実施報告』
- 社団法人北方圏センター（2005）『海外研修報告2005』
- 福島県（2005）『うつくしま県民の翼2005報告書』
- SRID Students Club（2006）『STUDY TOUR 2006 in Cambodia』
- 早稲田大学生、筑波大学生（2006）『国際協力視察の旅報告レポート』
- 大谷女子大学コミュニティー関係学科（2006）『コミュニティー研究演習報告集』
- （財）国際開発高等教育機構（2004）『NGO 海外研修 参加型プロジェクト形成 実施報告書』
- （財）国際開発高等教育機構（2005）『国際開発入門コース 実施報告書』
- （財）佐賀県国際交流協会（2005）『カンボジア交流協力推進研修 STUDY TOUR 報告書』
- （財）神奈川県国際交流協会（2004）『カンボジアスタディーツアー報告書』
- （財）神奈川県国際交流協会（2005）『カンボジアスタディーツアー報告書』
- （財）神奈川県国際交流協会（2006）『カンボジアスタディーツアー報告書』
- JICA 筑波/(財)茨城県国際交流協会（2003）『カンボジアスタディーツアー報告書』
- JICA 筑波/(財)茨城県国際交流協会（2004）『カンボジアスタディーツアー報告書』
- JICA 筑波/(財)茨城県国際交流協会（2005）『カンボジアスタディーツアー報告書』
- JICA 筑波/(財)茨城県国際交流協会（2006）『カンボジアスタディーツアー報告書』
- JICA 筑波/(財)茨城県国際交流協会（2007）『カンボジアスタディーツアー報告書』
- JICA 中国/(財)ひろしま国際センター（2006）『カンボジアスタディーツアー報告書』
- JICA 中国/(財)ひろしま国際センター（2007）『カンボジアスタディーツアー報告書』